

審査の結果の要旨

氏名 新倉量太

本研究は下部消化管出血患者において重篤な予後を予測するために、下部消化管出血患者を対象として、院内死亡率と関連する危険因子の検討、さらに、原因不明の消化管出血患者を対象を限って、累積再出血率を調べ、再出血予測モデルの作成を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 日本全国規模の入院データベースを用いて、下部消化管出血患者 30846 人中院内死亡率は 2.5% (782 人) であることを明らかにした。
2. 高齢、男性、併存疾患(慢性心不全、慢性腎不全、肝硬変)、非大学病院、非ステロイド性抗炎症薬使用、低 Body Mass Index、輸血、止血治療(血管塞栓術および外科手術)が院内死亡の危険因子であった。
3. 原因不明の消化管出血患者の累積再出血率は 12 カ月で 11.0%、60 カ月で 35.3%であった。
4. 原因不明の消化管出血患者において、5つの危険因子(女性、肝硬変、ワルファリン使用、顕性出血、カプセル内視鏡有意所見)を用いた再出血の予測モデルを作成した。さらに予測モデルは、再出血のみでなく、輸血、入院期間、死亡も予測することができた。

以上、本論文は下部消化管出血患者において、日本全国の大規模データベース、多施設の原因不明の消化管出血患者のコホートの解析から、下部消化管出血の院内死亡率と危険因子、原因不明の消化管出血患者の再出血の予測モデルを明らかにした。本研究はこれまで小規模なサンプルサイズの報告では検討できなかった下部消化管出血患者の院内死亡の危険因子の解明に重要な貢献をなすと考えられる。さらに、未知に等しかった、原因不明の消化管出血患者の再出血の予測モデルの確立にも貢献することができると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。